



謎の青葉



川崎ゆきお

狭いが勢いよく流れている小川がある。農業用水だろうか。田島は橋の上から見ている。周囲はもう住宅地だ。下水は地下の下水管に行く。だから殆どのドブは排水溝で、雨でも降らないと水は流れていないことが多い。

しかし、そのドブは小川と言えるほど綺麗な水が流れている。きっと大きな川と繋がっているのだろう。そこからの水だ。

春先の日差しが暖かく石垣を照らす。古い用水路のためか、趣がある。しかし川底はコンクリートだ。

田島が橋だと思っているところは、実は川の蓋。道が狭いので歩道がない。そのため横を流れる小川に蓋をしたのだろう。その蓋が途切れ、川が現れる。その手前の蓋の上に田島は立っていたわけだ。

川面に川岸の家が映っている。今風の家ではないが、古い家ではない。元々古い家だったのが改築し、それもまた古くなっている。

川面に映るそんなものを見ていたのだが、ふと目を少しだけ上げると青い葉がある。木の葉だ。それが川面にかかっている。その根本は川沿いの家の庭。

その葉が非常に明るい。緑と青の間ほどの色。新緑だろう。

田島はたまにここを通るのだが、今までこんな木があったことに気付かなかった。大きな木でもないし、目立つ木でもなかったためだろう。

それ以前に、木などあまりよく見ていなかった。たまに目にするのは神社の大木や、何かの祠の前に立っている古木とかだ。それらは目印にもなるし、いやでも目に入る。存在感があるためだ。

他人の家の庭にあるような木など、殆ど見ていない。見ていたとしても、木がある程度だ。

しかし今、川縁にあるその木が気になった。

何度も通っている道だ。小川の蓋から川面を見るなど、今までにないようなことをした。

季節が暖かくなってきたので、陽気に誘われ、久しぶりに散歩に出たためかもしれない。

そんな木の梢が小川にかかっていたのかどうかなどは、どうでもいいことだが、多少は記憶に残っているはず。しかし、それも無理かもしれない。そんな情報は必要ではないためだろう。しかも庭木など、どうでもいいことなのだ。

さて、これは何だろうと、田島は考えた。いや、思い出そうとしたのだが、これは不可能に近い。

諦めかけて、立ち去ろうとしたとき、急に来た。

「紅葉だ」

モミジの葉なのだ。急に思い出した。この川辺に紅いものがあったことを。だから、紅葉の頃に見ていたのだ。ただ、ポツンとそれだけしかないの、目立つただけで、その季節、もっと見事で目立つ紅葉があった。一本ではなく、何本も植えられているような。

だから、今見ているモミジは小物で、大したことはない。しかし、ここも紅いなあ、程度には見えていた。

そして新緑の季節。その庭の植木も青葉を出し、もうモミジがモミジである存在感は薄い。青

葉の中に埋まり込んでいる。

田島はやっと、その木の正体が分かった。

それだけのことだ。

了